

"暮らしの応援隊"派遣

仮設住宅のコミュニティの核となる「お茶っこサロン」。応援隊員も出向いて相談にのる。



(八尾市)の森川仁文さん(35)と林真也さん(39)。大槌町は大津波によって町役場をはじめ主要な建物が流されるなど深刻な被害を受けた。町内48カ所に仮設住宅が設置され、約2千世帯4700人が生活をしているという。

森川さんらは地元的生活支援相談員とともに、一日約20〜30軒の仮設住宅を訪ね、独居高齢者の見守りや、援護が必要な人の把握に当たった。

その中で早急な課題として感じたのが、仮設住宅でのコミュニティづくり。このため、各仮設住宅で徐々に開設が進んでいる寄り合いの場「お茶っこサロン」にも出向き、住民の相

高齢者、障害者らを長期的に

府社福協の部会、大槌町へ1年間

東日本大震災

東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県大槌町の高齢者や障害者らの生活再建支援のため、府社会福祉協議会の老人施設部会が「暮らしの応援隊」として、会員施設の専門職らを同町に派遣する取り組みを始めた。1年間にわたり同町で高齢者の見守りなどをサポートする。

「お茶っこサロン」は、特別養護老人ホームや介護老人ホーム、ケアハウスなど同部会に参加する442施設の「コミュニティソーシャルワーカー」ら、2人1組を15日交代で派遣している。「仮設住宅は山を切り崩して建てた所が多く、買い物や病院に行くにも交通の便が悪い。高齢者や足の不自由な人は、家に閉じこもりがちになる」

そう話すのは、第1陣として8月1日から15日まで現地に赴いた八尾隣保館

談に感じるなどの活動も始めている。

もう一点、隊員たちが痛感したのは、大阪に比べて福祉サービスの選択肢が少ないこと。同部会では福祉の御用聞きをモットーに、平成16年から社会貢献事業として府内の生活困窮者支援活動で培ったノウハウを生かし、被災者に寄り添いながら、地元のパースに合わせた相談活動や人材育成などの長期的なサポートをしていきたいとしている。

「応援隊」は、特別養護老人ホームや介護老人ホーム、ケアハウスなど同部会に参加する442施設の「コミュニティソーシャルワーカー」ら、2人1組を15日交代で派遣している。「仮設住宅は山を切り崩して建てた所が多く、買い物や病院に行くにも交通の便が悪い。高齢者や足の不自由な人は、家に閉じこもりがちになる」